



キルギスの電気工

松本 侑壬子・ジャーナリスト

標高 5,000 メートルの天山山脈の麓、かつてシルクロードの要所であったキルギス共和国は、“中央アジアのスイス”の異名をもつ風光明媚な国である。水清きイシク・クル湖のほとりの小さな村に 1 本の手作りの風車が立っている。建てたのは、この映画の主人公“明り屋さん”と呼ばれる電気工である一。

日本ではあまり馴染みのない国だが、名もなき主人公の姿を通して、寄る辺なき時代に小さな明りを見るような温かい作品だ。

村の唯一の電気工（アクタン・アリム・クバト監督自身が演じている）は、村の家々のアンテナや電気の修理をはじめどんな小さな用事でも、頼まればすぐに自転車で駆けつけ力を貸す。親しみを込めて“明り屋さん”と呼ばれる彼は、電気代が払えない貧しい老人の家には、無料で電気を使えるようにこっそりメーターに細工をすることもある。むろんそれは電気泥棒、すなわち違法行為であり、見つければ警察に連行される。するとすぐに妻が駆けつけて「本物の犯罪者を捕まえてよ。主人は人助けをしているのよ」と強硬に抗議して救い出すのだが。

電気は貴重だ。村には遙か草原の向こうから長いリボンのように続く道に沿って電柱が村まで来ているのだが、供給は不安定だ。明り屋さんの夢は、風の強い川向こうを風車で埋め尽く

し、風力発電でこの村の電力を賄うことである。

ソ連崩壊後独立して 20 年。中央では政治の腐敗や経済発展に絡む汚職が渦巻き、ラジオやテレビで都会のデモの様子が伝わってくる。こんな田舎にも開発の波は及び、土地買占めを狙う連中がやって来て、国会議員や村長の座をめぐるキナ臭い策略が動き始める。その一方、村人は昔ながらのコク・ボル（山羊を奪いあう伝統的な騎馬競技）に興じ、子どもは石けりや競馬に夢中。高い木に上った少年は「山の向こうが見たかった」と言う。「俺も子どものころ、そうだった」と明り屋さん。大人と子どもが同じ夢もてるほどここでは時間の流れは緩やかだ。

だから、村に来た中国の投資家の接待に、村の娘を提供しようとする一味には黙ってられない。暴れた明り屋さんは仕返しに散々痛めつけられ、川に投げ落とされる。降り始めた雨が激しい暴風雨になる。すると、風車のトタン板製の羽が勢いよく回り始め、何と！つなげた電線の先の裸電球に明りが少しずつ灯り始めたではないか。再生可能、エコエネルギーの風力発電の明りだ。原発の放射能に怖える現在の日本から見れば、こんなに簡単にクリーンな電力は起こせるものなのか！と何だかうれしくなる。実際、この初々しい明りに、監督は村の将来への希望を託しているに違いない。

しかし、また一山紫水明のこの美しい村も、やがて開発され、高価で便利で危険なエネルギーによる“近代的生活”が浸透してくるのだろうか。電気を村に導くために電柱の上から見守ってきた村の生活は、今後どう変わっていくのだろうか。ゆめ、電気のために放射能の心配なぞ無縁であってほしい。こんな老婆心をふと抱いてしまうのは、3.11 後の日本人ならでは、であろうか？

『明りを灯す人』

キルギス仏独伊蘭合作映画 (80 分) /
アクタン・アリム・クバト監督

10月、シアター・イメージフォーラムほか全国ロードショー

